[曲 名] Serenata (Don Giovanni)

歌劇ドン・ジョヴァンニのセレナータ

[曲 種] variata

[作曲者] Carlo Munier

カルロ・ムニエル

[編曲者]

歌劇「ドン・ジョヴァンニ」は1787年プラハに初演されたモーツァルトの傑作でこのセレナータは第二幕の第一場にある。
ジョヴァンニがエルヴィラの家にいる美しい女中を呼び出す為に歌う唄でモーツァルトは弦楽のピツィカートとマンドリンを使ってこの歌の伴奏をしており、
マンドリンという楽器が以来脚光を浴びる重要な動機となったことはよく知られている。
マンドリンの速いスタッカートの旋律によって他の楽器で現すことの出来ない麗妙さと気分を出すことに成功している。

君よ窓辺に立ちよりて、我が憂いをば解きませ。
君がみゆるしなくては、かくて逝かなむ身なれば。
愛に燃えたるくちづけ、恋いに輝けるその胸、
あこがるる身の悩みをいとしの君よ知りませ　（堀内敬三訳詞）

ムニエルは之を第一第二マンドリン、マンドラ、ギターの四部合奏とし二短調の序奏と一つの変奏を加えている。
原曲のマンドリン助奏はその儘マンドリンに現れるところもあり、歌の旋律も各楽器が持ち廻っている。
後半の変奏は最も興味深いところで一つの器楽曲として盛り上げているところにムニエルの手腕が窺われる。

本曲はマンドリン合奏に編曲されたものはドイツのヴェルキ、ベルギーのラニエーリのものがあるが、オリジナルな作曲手腕を用いたのは本曲のみである。

〔このセレナータについての挿話〕〕

イタリアのオペラ指揮者アルツーロ・ヴィーニヤ（Vigna Arturo 1863-1927)はドン・ジョヴァンニの公演に当たり、
いつもこのセレナータの中のマンドリンの代用としてヴィオリンのピツィカートを用いなければならなかったが、
或時フィレンツェで名優バツティスティーニ（Battistini M, 1857-1928 バリトン歌手の名優）が主人公に扮した時、
この町に有名なムニエルが住んでいることを知ったので彼を訪問して無理に出て貰った。
ムニエルは勿論実に美しい弾奏をしたのである。
然るにバツティスティーニは突然歌唱を中止した。
「おかしい！私は今まで、こんな風に伴奏されたことがない。成程マンドリンが入っていますね、だが私はそれに慣れていない。
私は余りにヴァイオリンのピツィカートに慣れすぎている。
何卒もう一度やって下さい。そうすれば慣れるでしょう。」と云った。
其の夜このセレナータは大成功に終わったという。

1969年10月31日発行

イタリアのマンドリンアンサンブル佳曲百曲集第一集より